

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

ファースト・カウ

2019年/アメリカ映画

配給：東京テアトル、ロングライド/122分

2023 (令和5) 年 12 月 29 日鑑賞

シネ・リーブル梅田



2023-152

監督・脚本・編集：ケリー・ライカ
ート

脚本：ジョナサン・レイモンド
原作：ジョナサン・レイモンド『The
Half-Life』

出演：ジョン・マガロ/オリオン・
リー/トビー・ジョーンズ/
ユエン・プレムナー/スコッ
ト・シェパード/ゲイリー・
ファーマー/リリー・グラッ
ドストーン

👁️👁️ みどころ

“カウボーイ”と聞けば、西部劇！しかし“ファースト・カウ”って一体ナニ？1820年代の日本は徳川第11代将軍徳川家斉の時代だが、新大陸アメリカでは西部開拓が始まろうとする時期。この時代の未開の地・オレゴン州にも中国系移民がいたそうだから、ユダヤ人と中国人はすごい。

甘いドーナツが人生を左右する！そんな諷刺文句で綴られる本作の根幹は、アメリカンドリームを夢見る男2人の友情物語だが、その何とも稀有な設定と展開に注目！

小さな成功から大きな成功へ！それは誰もが夢見るプロセスだが、本作後半は、なぜか男2人の逃亡劇になっていくので、その悲しい結末をしっかりと！

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□イントロダクションは？ストーリーは？■□

本作の公式ホームページのイントロダクションには次のとおり書かれている。

世界中の映画人が愛し、羨んだ傑作がついに日本へ上陸！

A24×ケリー・ライカート 映画史に刻まれる最強タッグが実現

現代アメリカ映画の最重要作家と評され、最も高い評価を受ける監督のひとりであるケリー・ライカート。

映画ファンの間で確かな人気を誇りながらも、これまで紹介される機会が限られていたライカート監督作品がついに、日本の劇場で初公開される！

長編7作目となる『ファースト・カウ』は、世界の映画祭でお披露目されるやいなや、たちまち絶賛の声が上がり 157 部門にノミネート、27 部門を受賞。

さらに映画人からの評価も高く、ポン・ジュノ、ジム・ジャームッシュ、トッド・ヘインズ、濱口竜介ら、名だたる監督たちが口を揃えて本作を称賛している。

そんな本作の本国配給を行なったのは、いま映画ファンに最も愛される配給会社 A24。
作家ファーストでありながら大ヒット作を次々と世に送り出している A24 と、一貫したスタイルで映画を撮り続けているライカート監督のタッグが初めて実現。
彼女の最高傑作との呼び声も高い本作が誕生した。

また、ストーリーは次の通りとされている。

甘いドーナツが人生を左右する——！

アメリカン・ドリームを夢見る男たちの友情物語

物語の舞台は 1820 年代、西部開拓時代のオレゴン。

アメリカン・ドリームを求めて未開の地にやってきた料理人のクッキーと、中国人移民のキング・ルー。

共に成功を夢見る 2 人は自然と意気投合し、やがてある大胆な計画を思いつく。

それは、この地に初めてやってきた“富の象徴”である、たった一頭の牛からミルクを盗み、ドーナツで一攫千金を狙うという、甘い甘いビジネスだった——！

■□■スクリーンのサイズは？色彩は？陰影は？■□■

映画は大スクリーンで見なければ！それが常識だが、なぜか、本作は正方形に近いスタンダードサイズだからビックリ！また、去る 12 月 6 日に観た塚本晋也監督の『ほかげ』(23 年) では、徹底したスクリーンの暗さに悩まされたが、本作もそれと同じように、全体的に暗いトーンで統一されているから、アレレ・・・？

考えてみれば、戦後の焼け野原となった東京のバラックに住んでいる人たちに十分な明かりがなかったのは当然のこと。しかし、西部開拓史が本格的に始まる直前、1820 年代の未開の地・オレゴンに住む人々にも、明るい LED 電灯はもとより蛍光灯も白熱灯もなく、せいぜいランプ程度しかなかったのも当然だから、その時代の夜が暗かったのは仕方ない。したがって本作では、アラン・ドロンが主演した名作『太陽がいっぱい』(60 年) で見たような、さんさんと降り注ぐ太陽の光は全く期待できないので、それは悪しからず。

■□■時は西部開拓時代。舞台はオレゴン州。本作は西部劇？■□■

本作の時代は、本格的な西部開拓史が始まる少し前の 1820 年代。そして舞台は、アメリカ大陸西海岸に位置するオレゴン州だ。

1820 年といえば、徳川時代の日本は 11 代将軍徳川家斉の時代だが、本作冒頭に映し出されるのは、コロンビア川を平底の大型船がゆっくり進んでいく風景だからすごい。1820 年代の江戸の隅田川では花火大会が開催され、船遊びも盛んだったが、こんな大型の船は到底考えられなかった。したがって、それから約 30 年後の 1853 年に起きた“黒船騒動”に日本中が飛び上がったのは当然だ。

冒頭に見る、そんなのどかな風景に続いて、次は 1 人の少女が犬と戯れる風景が映し出される。冒頭のシーンと同じようなのどかな風景ながら、少女の服装から見ると、これは

明らかに現代だ。そして、盛んに地面を掘り返している犬を制した少女がそこを見ると、そこには人間の頭蓋骨らしいものがあつたからビックリ！そこで、少女が自分の手でさらに土を掘り返していくと、何と2体の人骨が姿を現してくることに！『ファースト・カウ』と題された本作の時代は1820年代、舞台はオレゴン州だが、これは一体ナニ？

オレゴン州を舞台にした1820年代のアメリカを描いた映画と聞けば、私は中学生の頃にで見た連続TVドラマ『幌馬車隊』を思い出すが、ケリー・ライカート監督が脚本を書いた本作は西部劇ではない。したがって、先住民は登場するものの、インディアンvs騎兵隊の銃撃戦は一切登場せず、まさに西部開拓時代の未開地だったオレゴン州の野山そのものの中でストーリーが展開していくので、それに注目！

■□■テーマは男同士の友情！2人の主人公のキャラは？■□■

本作冒頭、「鳥には巢、蜘蛛には網、人間には友情」の言葉が登場する。これは、詩人ウィリアム・ブレイクの言葉だそうだが、なるほど、なるほど。海援隊を作った坂本龍馬と、陸援隊を作った中岡慎太郎の友情をはじめ、男同士の友情には古今東西さまざまなものがあるが、本作に登場する2人の主人公のキャラは、それらとは大違いの、極めて珍しいものだ。

本作はジョナサン・レイモンドの小説『The Half-Life』に惚れ込んだケリー・ライカート監督が映画化を渴望し、長年の構想の末に実現したものだが、その一方の主人公はアメリカン・ドリームを求めて未開の地にやってきた料理人のクッキー（ジョン・マガロ）、そして、もう一方の主人公は、クッキーが森の中で毛皮罽獵の一团と一緒に逃げ回っていた中で出会い、意気投合した男で、とある事情で追われる身となった中国系移民のキング・ルー（オリオン・リー）だ。広大な自然の中でキング・ルーがクッキーと出会い、匿ってもらったことから、2人の男の間に男同士の友情が形成されていくことに。

■□■牛の乳はチョー貴重品！それをドーナツに使うと？■□■

アメリカの西部劇にはしばしばカウボーイが登場する。したがって、広大なアメリカ大陸には大量の牛がお似合い。そう思っていたが、西部開拓史が本格的に始まる直前の1820年当時の未開の地オレゴン州では、乳牛はチョー貴重品だったらしい。

本作に登場する「ファースト・カウ」を保有しているのは、お茶にミルクを入れるために牛を購入した仲買商（トビー・ジョーンズ）。ピューリタンが入植した広大なアメリカ大陸の未開地オレゴン州に原住民がたくさん存在していたのは当然だが、私はその時代にすでに中国系移民が存在していたことにビックリ！さらに、キング・ルーが乳牛から絞った乳でドーナツを作ろうとしたアイデアにもビックリ！さすが、ユダヤ人と中国人は世界で一、二を争う利口な人種だということがよくわかる。そんなアイデアを早速クッキーが実行し、通行人の目の前で作ったドーナツをを5個6個と売ってみると・・・。

■□■一攫千金の“夢の行方”は？■□■

人間は一つの成功をすると、次の成功を願うもの。そして、小さな成功を勝ち取ると、

さらなる大きな成功を夢見るものだ。もっとも、その点、本来が料理人であるクッキーの欲望は人並みだったが、当時の“投機家”ともいえるキング・ルーの一攫千金を夢見る欲望はとてつもなく大きいものだったから、そこから本作の波乱万丈のストーリーが展開していくことになる。

たった一頭しかいない乳牛から絞った乳で甘い味をつけたドーナツの売れ行きは抜群。これなら、もっと大量に売れば大儲けも可能だ。しかし、あまり調子に乗っていると、甘みの秘密がバレてしまうのでは？料理人であるクッキーはそう心配したが、野心的な投機家であるキング・ルーはもっと、もっと・・・と願ったから、今夜もせっせと乳牛の乳を絞る作業に・・・。しかし、2人が作ったドーナツの味を気に入った仲買商のお屋敷に招かれて、料理を披露するレベルになってくると・・・。

2024年の正月にテレビ放映されたジェームズ・ディーン3作目の主演作が『ジャイアンツ』(56年)。そこでは、一匹狼の若者が石油を掘り当てたことによって、一躍大富豪になるストーリーが描かれていたが、それはあくまで例外中の例外。たかが一頭の乳牛から絞った乳で作った数個のドーナツが好評を博しただけで、本当にキング・ルーの一攫千金の夢が叶えられるの？

■ラストは西部劇とは異質の逃亡劇に！■

本作では、土地持ち、屋敷持ちの富裕な仲買商がいる一方、白人たちの開拓の犠牲になっている原住民も多数登場するからその格差にビックリ。その中で、クッキーのような白人の料理人はまともな中間業者だが、中国系移民のキング・ルーの身分上の位置づけは？

本作には1つ大きな欠陥がある。それは、原住民のセリフが全く字幕に表示されないことだ。一言、二言のセリフならそれも仕方ないが、長いセリフが全く字幕表示されないのは本作の欠陥と言わざるを得ない。そのため、本作における原住民の立場の理解は少し不十分にならざるを得ないことに・・・。

それはともかく、クッキーとキング・ルーが作っているあのドーナツの甘い味が、オレゴン州に一頭しかいない、仲買商所有の乳牛から盗んだ乳で作っていることがわかると、仲買商が銃を持って2人の追跡に向かったのは当然だ。アメリカン・ニューシネマの代表作たる『俺たちに明日はない』(67年)では男同士の友情と逃亡劇が、女性版アメリカン・ニューシネマの代表作で、近々4Kで公開される『テルマ&ルイズ』(91年)では、女同士の友情と逃亡劇がメインストーリーだが、本作ラストも、仲買商から銃で追われたクッキーとキング・ルー、2人の友情と逃亡劇になるので、それに注目！

一方は木の根っこに隠れ、他方は川の中に飛び込んだことによって何とかうまく仲買商の追跡を逃れた2人が再び小屋で出会うことができたのは奇跡に近いこと。そして、さらに仲買商の目を逃れるべく遠い地を目指した2人だが、一方が足の怪我をした状況では、休憩も必要だ。そんな2人が横たわって一時の仮眠を取ろうとしたのは仕方ないが、さて、その結末は？

2024(令和6)年1月5日記